

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02875

研究課題名(和文)文化言語の多様な子どものための対話型アセスメントの教育的効果に関する実証研究

研究課題名(英文)An Empirical Study of the Educational Effectiveness of Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children

研究代表者

櫻井 千穂 (Sakurai, Chiho)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：40723250

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、文化的言語的に多様な(CLD)児童生徒の言語能力を測る『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』(文部科学省2014)の教育的効果を検証した。DLAを効果的に活用するには、DLA実施者に子どもの発話を促すキャフオールディングが求められることが明らかとなり、その構造も確認できた。さらに、そのスキヤフオールディングとCLD児童生徒への授業実践で必要とされる教授スキルとの類似性も明らかとなったことで、DLA実践力の向上がCLD児童生徒への教育に活かされることが示唆された。以上の研究成果を受け、CLD児童生徒の多数在籍校でDLA評価を取り入れたカリキュラム改革が進んでいる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で得られた知見は、学会発表や専門書としての公開のみならず、教育委員会や学校教育現場、地域のNPO、ボランティア団体に向けた研修といった形で社会に還元している。一対一の対話形式でCLD児童生徒の言語能力を測定するDLAでは、DLA実施者の力量に結果が左右されることが避けられない。全国の学校教育現場にDLAが普及して行く中で、DLAの有効な実施方法を示し、教育との連動を明示化することは、CLD児童生徒教育に携わる人材育成といった観点から、社会への貢献が大きく、意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)： We examined the educational effectiveness of a formative assessment called "dialogic language assessment (DLA)", developed by MEXT, 2014. It was found that DLA requires effective scaffolding of DLA users (teachers). The structure of the scaffolding was also clarified. Furthermore, the similarities between the scaffolding in DLA and the teaching skills needed in the classroom for CLD students were revealed. It was suggested that the improvement of assessment skills through DLA can lead to improved educational skills for CLD students.

In response to these research findings, we are in the process of building a curriculum that incorporates DLA assessment in a school with a large number of CLD students.

研究分野：日本語教育、年少者日本語教育

キーワード：対話型アセスメントDLA スキヤフオールディング ダイナミック・アセスメント CLD児童生徒 ユニバーサルデザイン 複数言語教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 文化言語の多様な子ども (Culturally Linguistically Diverse Students; 以下 CLD 児童生徒 (カミンズ, 2011)) の学校教育現場での増加を受け、文部科学省は『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA (Dialogic Language Assessment)』(2014)を開発した。これにより CLD 児童生徒の日本語能力評価の方向性が示され、全国の学校教育現場においても普及を見せている。

(2) DLA は CLD 児童生徒の複数言語の四技能の力を、対話を通して包括的且つ多角的に診断するアセスメントであり、実施過程で評価者が適切な教育的介入を行うことにより、子どもの学びを促し、将来の学習可能性も評価できるといった「発達の最近接領域 (Zone of proximal development; 以下、ZPD)」の理論 (Vygotsky, 柴田訳, 1962) にもとづくダイナミック・アセスメントとしての特徴も併せ持つ。

(3) しかしながら、この対話型アセスメントが実際に CLD 児童生徒の複数言語教育において教育的効果を発揮し、「学習としての評価」として成立することを、調査・分析により実証した研究は管見の限りでは見られない。また DLA が教育的効果をもたらす方法の一つとして、どのようなスキヤフォールディング (Wood ほか 1976; 以下、Scf とする) が子どもの学びにつながるかといった構造の解明もなされていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、こうした社会的・学術的背景をふまえ、対話型アセスメント DLA の教育的効果の実証を目的として、以下の3つを掲げた。

- (1) DLA における Scf の構造を明らかにし、DLA の学習としての評価の妥当性を検証する。
- (2) CLD 児童生徒への実際の指導・支援に、DLA 評価を意識的に取り入れた実践を行うことにより、その効果を検証する。
- (3) DLA の実践研修等を通して、研究で得られた知見を教育現場に広く還元する。

## 3. 研究の方法

(1) ミクロ Scf の実態解明としては、DLA 実施の音声データを用いて、1対1の対話による評価の過程で見られる DLA 実施者と CLD 児童生徒とのやりとり・相互作用を量的・質的に分析する。そして、そのやりとりの中で現れた Scf を抽出・コード化することにより Scf の構造を解明する。また、マクロ Scf の一つとして、DLA <読む> の構造が CLD 児童生徒のレベルに応じて読書力を適切に測れるように設計されているかを検証するために、テキストレベルの妥当性と順位性の検証を行う。さらに、DLA 実施者に対して質問紙調査を実施し、DLA の教師力の向上への寄与を検討する。

(2) 協力関係にある CLD 児童生徒が在籍する学校に DLA 評価を取り入れたカリキュラムや授業を実践してもらい、その教室活動を録音・録画し、教師と児童生徒との相互作用を質的に分析する。

## 4. 研究成果

(1) DLA のミクロ Scf の構造解明については、対話型アセスメント DLA <読む> の音声データ 365 本を文字化したものを用いた。国内外の Scf に関する先行研究をふまえ、「あらすじ/要点の口頭再生」と「内容についてのディスカッション」のパートについて、Gibbons (2003) ほかの「言い換え」「方向付け」「修正示唆」「知識の文脈化」「情意面」という5つのカテゴリーに沿ってコード化したところ、9172 の Scf が抽出された。さらに、その下位カテゴリーとして、「再生の明示的指示」「暗示的指示」, 言い換えの「要約」, 「付け足し」, 方向付けの「促し」, 「絞り込み質問(リスト)」, 「絞り込み質問(追加情報)」, 「パラフレーズ(肯定)」, 「パラフレーズ(確認)」など54のコードが確認された。

Scf 必要度が高い低年齢児の場合、「登場人物確認」, 子どもの発話を繰り返す「発話反復」と「絞り込み質問」の併用、子どもの発話の「言い換え・付け足し・要約」の後の「促し」が効果的であることがわかった。また、情意面の「褒め」や「肯定・納得」「待ち」も頻出している様子が確認できた。上のレベルのテキストを選択した高学年で「要点の口頭再生」場面において最もよく見られたのは「詳細求め」であった。そして、その後の「内容に関するディスカッション」場面で、「意見求め」, 「肯定」と「反論」の併用が効果的であることがわかった。ここでは「褒め」は低年齢児のときほど見られずとも、やり取りが成立しているケースが多く確認できた。

一方で、効果的ではない Scf としては、子どものほうから触れなかった「未出の情報に基づく質問」や「曖昧な促し」、一方的な「知識伝授」が確認され、これらは半数以上で否定的な結果を誘発することがわかった。さらに、Scf は、ただ単に「何を使用するか」だけではなく、「どこで使用するか」といった出現場所と併用の方法が重要であることもわかった。

(2) マクロ Scf の一つとなるアセスメント構造としての DLA<読む>のテキストレベルの妥当性に焦点を当てた調査では、ある公立小学校在籍の日本語母語児童 219 名に対してあらかじめ選定した国語副読本 11 冊と DLA<読む>のテキストのうち学年相当レベル周辺の 2 冊を DLA<読む>の手法で読ませ、理解度得点と音読速度を因子として統計的にテキストの順位性を検証し、フォローアップインタビューから難易度規定要因を質的に探った。評定平均、標準偏差から本調査の日本語母語話者集団にとって学年相当テキストは理解できるレベルであることが確認された。難易度には一部を除くテキストに順位性が確認され、妥当性を実証した。また質的分析からは文字の符号化の習得度が難易度規定要因に影響する様子が観察された。この結果をもとに、DLA<読む>の代替テキストについてのアセスメント実践ガイドを作成した。現在、書籍として出版準備を進めているところである。

(3) 以上の DLA の構造の分析と並行して、DLA 実施者 15 名に対して対話型アセスメントの教育的効果に関する質問紙調査を実施した。この結果、DLA 実施の経験と DLA 研修会への参加によって、DLA の実施方法のみならず、CLD 児童生徒の言語能力の見立てのスキル(評価の視点)が向上することが確認された。また、DLA 実施中の Scf と実際の授業における教師の発問調整との間に関連性があることが示唆されたため、今全国各地の教育委員会・学校・国際交流団体主催の DLA 研修(年 30 回程度)において、教育・支援につながる評価のあり方を重点的に取り上げ、Scf の方法に焦点をおいた研修を実施することで、教育現場への研究成果の還元を努めた。

(4) 教育現場での実践研究としては、ある CLD 児童の少数在籍学校において、授業力があると周囲から認められる教師の取り出し教室での JSL カリキュラム授業における Scf を質的に分析した。具体的には、低学年の JSL 児童 3 名に対する国語 2 本と算数 1 本の授業の映像データを、ELAN(細馬・菊池 2019)を使用して分析し、授業中の発話や行動を総合的かつ探索的に考察した。分析指標には Sheltered Instruction Observation Protocol(SIOP)(Echevarria ほか 2017)を援用した。結果として、SIOP で効果的な授業の指標とされる 8 カテゴリーの 30 要素がほぼ全て使用されており、DLA における Scf との類似が多く確認された。

(5) 以上の研究結果をふまえ、ブラジル人生徒の割合が 40%を超える集住地域の中学校において学校全体をあげて教育改革に取り組み、これまでの研究成果にもとづく現場での実践と効果検証を実施した。具体的には DLA<読む>の短縮版と二言語で評価を行うための能力記述文(案)を作成し、日本語とポルトガル語で生徒のステージを確認、言語能力に応じた個別指導のための体制づくりを行った。日本語力のステージ 1 から 2 前半用のテーマ・トピック別カリキュラム、ステージ 2 後半から 3 用の JSL カリキュラムの授業、ステージ 4 以上の在籍学級で Scf を取り入れたユニバーサルデザイン授業である。また、ステージ 3 から 4 の生徒には DLA<読む>を活用した二言語での読書力育成プログラムを導入、ポルトガル語のステージが 4 以上の生徒には一部の授業でポルトガル語での先行学習ができる環境も整えた。この実践の効果検証に関しては、本研究の発展的研究課題として取り組んでいる基盤研究(C)20K00726 により、実施する予定である。

#### <引用文献>

- ヴィゴツキー, L. (1962/2001) 柴田義松(訳)『新訳版思考と言語』新読書社  
カミンズ, J. (2011) 中島和子(訳著)『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学  
細馬宏通・菊地浩平編(2019)『ELAN 入門-言語学・行動学からメディア研究まで』  
ひつじ書房  
文部科学省(2014)『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA』  
Echevarria, J., Vogt, M. E., & Short, D. J. (2017). *Making content comprehensible for English learners: The SIOP Model. 5th edition*, New York: Pearson.  
Gibbons Pauline (2003) Mediating Language Learning: Teacher Interactions With ESL Students in a Content-Based Classroom *TESOL Quarterly*, 37, 2, pp. 247-273.  
Wood, D., Bruner, J.S. & Ross, G. (1976) The role of tutoring in problem solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 17, pp.89-100.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 真嶋潤子	4. 巻 Vol. 21, No.1
2. 論文標題 「母語喪失」と子どものアイデンティティ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 50-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Hatasa & Tomoko Watanabe	4. 巻 14,3
2. 論文標題 Japanese as a Second Language Assessment in Japan: Current Issues and Future Directions	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 LANGUAGE ASSESSMENT QUARTERLY	6. 最初と最後の頁 192-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 3件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 櫻井千穂・李在鉉・岡崎渉・永田良太
2. 発表標題 JSL 児童に対する効果的な授業方法の検討 授業力があるとされる教師によるJSL カリキュラムの授業談話分析を通して
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 真嶋潤子
2. 発表標題 「日本語教育における「評価」 - 何のために何をもち「評価」するのか - 」
3. 学会等名 カナダ日本語教育振興会CAJLE 2019年次大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井千穂・真嶋潤子・中島和子・野口裕之
2. 発表標題 DLA<読む>の構成概念妥当性の検証 テキストレベルの順位性をめぐって
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 篠原啓史・松本友美・平吹洋子・櫻井千穂
2. 発表標題 DLA<読む>短縮版を活用した生徒の現状把握と支援体制の構築 外国人生徒の教科学習言語能力の向上を目指して
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第3回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡部倫子
2. 発表標題 DLA<読む>研修による教員の成長
3. 学会等名 大学日本語教員養成課程研究協議会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 櫻井千穂
2. 発表標題 対話型アセスメント DLA における発話を引き出すスキャフォールディング DLA<読む>のリテリングの分析を通して
3. 学会等名 2017年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 櫻井千穂
2. 発表標題 文化言語の多様な子どもの二言語能力の育成 学校現場におけるアセスメントとサポートのあり方を考える
3. 学会等名 第43回日本コミュニケーション障害学会学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Majima & Chiho Sakurai
2. 発表標題 A Study of the Development of the Speaking Ability in Two Languages of the Culturally Linguistically Diverse Children in Japan
3. 学会等名 EAJS2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 真嶋潤子
2. 発表標題 日本語学習から第二言語習得研究へ
3. 学会等名 ネルー大学国際セミナー「言語学と文学の内的接続 - 日本語のテキストを「読む」ということ」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 真嶋潤子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 330
3. 書名 母語をなくさない日本語教育は可能か - 定住二世児の二言語能力	

1. 著者名 櫻井千穂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 340
3. 書名 外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	真嶋 潤子  (Majima Junko)  (30273733)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授    (14401)	
研究分担者	渡部 倫子  (Watanabe Tomoko)  (30379870)	広島大学・教育学研究科・准教授    (15401)	
研究分担者	野口 裕之  (Noguchi Hiroyuki)  (60114815)	名古屋大学・教育学研究科(研究院)・名誉教授    (13901)	